

絵本大賞
(一般の部)

「この本とあゆむ将来の夢」

藤倉 みゆ

柳田先生お久しぶりです。

私は先生からいただいたメッセージ「一緒に生きていきたいと思います」と弟の声が聞こえる日がある」最近この言葉の意味が分かってきた気がします。私は大学生になり小児科で多くの患児やその家族の心を救う子供療養支援士を目指して勉強を頑張っています。

そんな私がここ数年何回も読んでいる絵本があります。この絵本を読んだ時、これは将来小児科で働くことが出来れば多くの家族と一緒に働く仲間

にお勧めしたい本です。チューリップのプーが主人公、かんだろうが水をあげて花を咲かす予定でしたが、かんだろうが病気になって水をあげられなくなってしまう。そんなプーが必死に自分で花を咲かせるために仲間と一緒に頑張るお話です。

プーやタンポポのポポたろうのことを、私は小児科で頑張っている子どもたちであるように思えました。そしてかんだろうは医療従事者や患児の家族のように考えるとたくさんメッセージが見えてきました。大学で多くの子供たちの闘病生活の講義を聞く中で、お母さんが話してくれた弟のことを思い出しました。弟が入院していた時、みんな一人ひとり違う病気で違うつらさがあったても年齢を超えて声を掛け合い、楽しい遊びなど子ども

ながらに相手のことを考え行動できる強さ。ポポ
たろうがプーに言葉をかけてそれに対してプーが
頑張っている様子にとても似ていませんか？この
後に、絵本の中にはポポたろうとプーがお互いを
けなしあうシーンもありましたが、きっとお互い
つらい思いを吐き出しているのかなと思いました。
そのページのポポたろうの表情が怒っていながら
も心配しているようで愛おしく感じました。

そしてもう一人の登場人物バラのバーバラーが
でってくるシーンでは、プーに対して厳しい言葉を
言っていて、なんでこんなことを言ってしまうの
だろうとちょっと悲しい気持ちになりました。し
かし、その言葉によりプーは頑張ろうとする気持
ちに変わっていく姿、そのような厳しい言葉が強
い気持ちで乗り越えていくきっかけになるのだと

考えさせられました。

その後、かんとたろうは病気が治りプーのことを
心配しながらベランダに行き、お互いの気持ちを
分かりあい、かんとたろうの涙によって立派に花を
咲かせられました。私は、子供たちの気持ちに共感
してあげたり、かんとたろうの涙のように少しでも
手助けが出来るようになりたいという気持ちを重
ねました。この絵本の最後には、「プーがのこした
タネは、ほかのタネよりつよいタネにそだったよ
うですよ。いのちはずーっとつづいていく」この
言葉に私も、たくさんメッセージを残してくれ
た弟が、最近私の横で頑張っていると話しかけてく
れているような気がします。このタネのように誰よ
りも強くたくましく小児科で働けるように頑張っ
て勉強し、子供たちと一緒にたくさん絵本と出

会いたいと思います。

柳田邦男先生からのメッセージ

〔大賞〕

藤倉みゆさんへ

みゆさん、もう大学生になっていたのですね。みゆさんが小学校一年生のときはじめてのおたよりも、六年生になってからの悲しい体験のおたよりも、それぞれに印象深い文章だったので、その後みゆさんはどのように成長したかなど、毎年絵本大賞の選考の時期になると思い出していました。

そうしたら事務局による一次選考を通して、私の手許に届けられた数十通の二次選考対象のおたよりの中に、みゆさんのお名前があったので、とて

もうれしくなりました。

みゆさんが第二回絵本大賞で大賞に選ばれた「だっこのしゅくだい」というおたよりを寄せてから、はや十二年もたつのですね。あの文章は、ママのだっこ、パパのだっこ、おばあちゃんのだっこの違いを、家族の情景が目には浮かぶように表現していて、その感性の鋭さに感動したものでした。おじいちゃんはおたのいたいのがなおつたらねというところでは、思わず笑ってしまいました。

しかし、五年生になったとき、重い病気を背負っていた弟さんがわずか五歳という短い人生を終えて亡くなってしまふという悲しい出来事があったのですね。どんなにか悲しかったことでしょう。でも、みゆさんは『だいじょうぶだよ、ゾウさん』という絵本を思い出して読み直したことで、旅立っ

た老いたゾウさんが仲良しだったネズミくんのころの中に生きつづけたように、弟さんは自分のころの中にならずにいるんだと思えるようになり、心の落ち着きを取り戻すことができたということでした。

みゆさんは、そのことを六年生になってからおたよりに書いて寄せてくださった。私はおたよりを読んで、小学生でも愛する弟との死別の悲しみに直面するなかで、絵本を介して自分なりにこころを癒して立ち直ることができるんだと、深く感動したものでした。そこで、優秀賞に選び、みゆさん宛のメッセージに、『一緒に生きているんだ』と思いつけると、きつと弟の声が聞こえる日があると思います。そんなときには、おたよりをくださいね』と書き添えました。

それからさらに六年が過ぎたら、みゆさんからすばらしい三度目のおたよりが寄せられたのです。その文章を読んで、私は涙が出るほどうれしくなりました。

みゆさんは、弟の死という悲しい体験を、自分の人生のなかでどう生かしていくかと前向きに考えたのです。そして、病院で入院生活を送る患児やケアをする家族のこころを支える「子ども療養支援士」になろうと決めて大学に進み、その学科で学び始めたのです。

そして、そういう専門職をめざすなかで、『いのちのはな』という絵本を何度も読んでいるのと。チューリップのプーが花を咲かせられるように水やりをしていたかたろうが病気になって水やりをすることができなくなったため、プーはそ

れでもなんとか花を咲かせようと、仲間のタンポポのポポたろうなどに支えられて頑張る話ですね。

みゆさんは、弟さんが入院していたときの小児病棟の様子をお母さんから聞いたので、その状況をこの絵本の物語に重ね合わせて考えたという。小児病棟では、「みんな一人ひとり違う病気で違うつらさがあっても、年齢を超えて声を掛け合い、楽しい遊びなど子どもながらに相手のことを考え行動できる強さ」が見られるというのですね。

絵本のかんたろうは、病気が治って、プーのところへ行き、水やりしてやれなかった申しわけなさから涙を流すのですが、プーはその涙を吸いこんで立派に花を咲かせることができたという終わり方になります。そして、みゆさんは、「子どもたちの気持ちに共感してあげたり、かんたろうの涙の

ように少しでも手助けが出来るようになりたい」と、すばらしい決意を明らかにしています。

そして、「たくさんのメッセージを残してくれた弟が、最近私の横で頑張っていると話しかけてくれているような気がします」とのこと。

みゆさん、ほんとうに成長しましたね。私は二十年以上にわたって、「いくつになっても絵本を読もう。絵本は人生のこころの友」と呼びかけてきました。十四年を数える荒川区の絵本大賞の参加呼びかけは、その私の活動の一つですが、今回、みゆさんの小学校一年生から大学生になって子ども療養支援士をめざすまでの十二年の歩みをたどると、絵本大賞の活動を続けてきたことには、十分に意味があったなと思いました。

みゆさん、これから子ども療養支援士の資格を

取って、何年か活動経験を積んだら、またおたより
を寄せてくださいね。